

## アンコール遺跡を通じた保存・修復研究（その3）

### 「経蔵」と呼ばれる建物の名称の由来と

### その機能についての一考察

On the appellation of an edifice called “library” and its function

1999年9月

荒樋久雄

#### はじめに

クメール建築の日本語訳「祠堂」<sup>1</sup>、「回廊」<sup>2</sup>、「経蔵」<sup>3</sup>、「塔門」、「舞楽殿」等は、日本語語彙中より近似した訳を充てたとあってよい。従ってそれらは、クメール建築を呼称する際の俗称に近く、各々の研究者により表記方法がまちまちで、建物を解釈するにあたり語弊が生ずる恐れがあり、日本語表記法の体系化が求められ、その試みも端緒についたばかりとあって良い<sup>4</sup>。

その中で「経蔵」と呼ばれる建物は、一般にはその内部に経典などが収められていたと説明される一方で、建物が本来有していた機能に未解明な点が多く、名前より想起される機能と、建物本来の機能が合致しないということが指摘されている（後述）。そこで本稿では、同建物に関して、呼称の由来を取り上げ、同建物の機能について類推、言及するものである。

#### 「経蔵」という呼称の由来

「この小祠堂」<sup>5</sup>は、仏語では“Bibliothèque”「ビブリオテック」と呼ばれる。現代カンボジア語では“Bannalay”「バナライ」と呼ばれるが、この語もパーリー語を語源とする20世紀に入ってから造語とされており<sup>6</sup>、仏語よりの翻訳と帰すべきである。従って、ここでは、何時頃より同仏語名称が用いられ始めたかを考える必要がある。

#### 他の建物の呼称

クメール建築におけるその他の名称に関しては下記の様な例が挙げられる。

<彫刻モチーフ>

“Salle aux danseuses”「サル・オウ・ダンスウース」(仏語)は、「舞殿」「舞楽殿」<sup>7</sup>という名称が用いられている。通説として、同名称は、この建物に彫刻されたアプサラの踊る姿に由来してお

<sup>1</sup> 仏像など信仰対象物を内部にまつる塔または小堂

<sup>2</sup> 宮殿・寺院などで、建物・庭などの周囲をとりまいている長く折れ曲がった廊下。

<sup>3</sup> (1)三蔵の一。釈迦の説いた教説の総称。(2)一切経(いっさいきょう)などの経典を納める建物。経堂。経楼。

<sup>4</sup> 一例として河野靖「1 建造物インベントリー」、藤木良明「2 建造物インベントリーについて」

カンボジアの文化復興(5) pp.145-159、上智大学アジア文化研究所 1991

<sup>5</sup> 本稿で問題としている“小祠堂”を“経蔵”という言葉で表現すると語弊を招く恐れがあるので、本稿内では出来るだけ「この小祠堂」と仮称する。

<sup>6</sup> Saveros POU, “Les noms de monuments khmère”, BEFEO LXXVIII, 1991, p.204

<sup>7</sup> 河野靖「彫刻の調査(パンテアイ・クデイ)」カンボジアの文化復興(5)、p16.上智大学アジア文化研究所 1991

り、機能的意味合いより派生した言葉ではない。<sup>8</sup>

< 建築形態 >

“Edifice a colonnes” 「エディフィス・コロ」(仏語)は、「列柱殿」と意識出来、建物のもつ建築形態上の要素により名称が決定されている。

< インド建築名称 >

“Gopura” 「ゴープラ」(日本語では「塔門」訳出)、“Mandapa” 「マンダパ」(日本語では「拝殿<sup>9</sup>」訳出)は、インド建築名称をクメール建造名称に応用している。

### 、ラジョンキエーの文化財目録

「この小祠堂」に対応する「ビブリオテック」という言葉は、<sup>かんけん</sup>管見<sup>10</sup>した限り、1901年発刊の「カンボジアの遺跡の文化財目録1」<sup>11</sup>が初期のものとして挙げられる。同目録では「この小祠堂」の呼称として、“Bâtiments annexes trésors ou bibliothèque”(訳述すると「付属建物、宝庫または図書館(経蔵)»)という複数の単語を用いている。また、現在では用いられていない「トレゾー」(Trésor)(日本語では「宝庫?」と訳出)という呼称は、推論するに「その種の建物には経典のような書物以外に、寺院に纏わる<sup>まつ</sup>宝物の類が収められていたと考えていた」ことを想起させる。またラジョンキエーは「ビブリオテック」という呼称を「この小祠堂」に用いた理由として、この建物の持つ“機能的な意味合い”ではなく、“ラオスやタイのパゴダにおけるヴィハーラのすぐ近くに位置する小祠堂名”を借用したとしている。

### セデス(George CÉDES)の小論文

現在見られる様に、「名称」と「機能的意味」が一致して考えられる様になった理由としては、1911年に発表されたセデス(George CÉDES)の小論文<sup>12</sup>に因るところが多いと思われる。セデスは、プラサット・クナ(Prast Khna)遺跡の「この小祠堂内に彫られた碑文を引用し、碑文の最後に用いられている「putakacramah」という言葉が「Bibliothèque」「経蔵」という意味に解され、「この小祠堂」の呼称に一致するとしている。また、「ayam」という言葉の存在が、写本を収める建物の場所を指し示していることは疑いないこととし、結論として、彼は「『この小祠堂』は確かにプラサット・クナのBibliothèque(経蔵)であった」として小論文を結ぶ。

セデスによるクメール研究の功績は、一方では「セデスによりクメールの歴史は解明され、打ち立てられた」と賞賛される程で、彼の論説により、一般的にも「ビブリオテック」という言葉が認知され、以後、次第に定着したと考えられる。

<sup>8</sup> STERN Philippe, LES MONUMENTS KHMERS DU BAYON ET JAYAVARMAN VII, PRESSES UIVERSITAIRES DE FRANCE, Paris, 1965 p.52

<sup>9</sup> 神社で、礼拝が行われる殿舎、御殿。

<sup>10</sup> [管の穴から見る意](1)見識がせまいこと。(2)自分の知識・意見をへりくだっていう語。「によれば」

<sup>11</sup> E. LUNET DE LAJONQUIERE, « Inventaire descriptif des monuments du Cambodge », Tome-I-III, 1902, 1907, 1911

<sup>12</sup> George CÉDES, « Études cambodgiennes; 6 Des édifices appelés bibliothèques », BEFEO 11(3-4), Hanoi, 1911, pp.404-406

## その他の論考

上記セデスの論以降、他の研究者による論考として下記の様なものが挙げられる。

<モーリス・グレイスの見解> (Maurice GLAIZE)<sup>13</sup>

ブラサット・クナにて発見された碑刻文が「この小祠堂」の呼称である「ピブリオテック」と一致していることは是認しつつ、やはり「この小祠堂」は一種の「聖具室」(sacristie)で、その中にはその他の聖書物や信仰対象物などが収蔵されていたであろうとしている。

<ジャン・ボワズエの見解> (Jean BOISSELIER)<sup>14</sup>

「この小祠堂」のうち、「南小祠堂(「南経蔵」)」の内部には概して「une frise des neuf deva」: 「九神像の彫刻石材(九曜石とも)」が収められていたようであるとしている。これは内部に「九神像の彫刻石材」が収められ、「この小祠堂」が信仰対象のための空間に用いられていたことを示唆している。

<クロード・ジャックの見解> (Claude JACQUES)<sup>15</sup>

「この小祠堂」は基本的には経典・写本の収蔵のためには用いられなかったことは殆ど確かであろうとした上で、「この小祠堂」の内部には信仰対象である「九神像の彫刻石材」が発見されていることを指摘し、かつ、いくつかの手がかりにより、この小祠堂は「火を用いた宗教儀式」(Le feu rituel)に供されていたとしている。

### ・実存遺構よりの考察

次に「この小祠堂」に見られる建築的特色について検討し、建物の機能を類推してみる。

#### A 側壁に穿たれた小窓

バコン(Bakong)の「この小祠堂」の側壁に見られる数多くの小窓が、次のバンテアイ・スレイ(Banteay Srei)に見られるような上部にスリット状の窓となり、それが形骸化して、タ・プロム(Ta Prohm)の様なバイオン期初期(12世紀後期)の寺院では、側壁に穿たれた穴が申し訳程度に残されている。クラウド・ジャックの指摘のように、「火を用いた宗教儀式」の際に、この窓が換気口としての役割を持っていたとすると、上部に位置することも納得できる。

#### B 主室奥に設けられたニッチ(壁龕)<sup>16</sup>

バンテアイ・スレイやタ・ケウなどの「この小祠堂」の主室奥の壁面にはニッチが設けられている。このニッチの役割は詳らかではないが、何がしかの信仰対象物を収めるために設けられたものであると考えられる。

#### C 主室中央に据えられた台座

バンテアイ・スレイやチャウ・サイ・デヴォーダの「この小祠堂」の主室中央には、信仰対象物(仏像、リングなど)の石造台座が残されている。またタイのパノム・ルンにも違った種類の石造台座が

<sup>13</sup> Maurice GLAIZE, ANGKOR, 4e edi, J.MAISONNEUVE, Paris 1933, pp.40-41

<sup>14</sup> Jean BOISSELIER, ASIE DU SUD-EST, Tome ILE, CAMBODGE, Paris, 1966, p.72

<sup>15</sup> Claude JACQUES 他(共著) d ABC daire d Angkor et l art Khmer, Flammarion, Paris, 1977, p.46

<sup>16</sup> 壁・柱の垂直面につくったくぼみ。彫刻などを飾る。ニッチ。龕(がん) 断崖を掘って、仏像などを安置する場所。壁龕。 仏像を納める厨子(ずし)。 棺おけ。死体を納める箱。

見られる。少なくともここで「何らかの信仰対象物が祠堂内部の中心を占めていた」と言うには十分な根拠となる。

\* \* \* \*

以上、三つの事例では、この小祠堂に見られる建築的特徴のうち、「この小祠堂に元来見られる機能」に関連した個所を列挙したのみであり、内部に経典が収納されていたことを否定する根拠を見出した訳ではない。しかし、少なくとも、「この小祠堂」の中心的な機能として、「九神像の彫刻石材」、「リング」もしくは「仏像」など、何らかの信仰物を祭るために供された建物であったことは間違いなし様である。

## ．まとめ

「ビブリオテック」という「機能的な意味合いを持った言葉」は、今世紀当初のラジョンキエーにより「この小祠堂」の元来の機能を見出せぬまま、ラオス、タイに見られると同様な小祠堂より名称を転用したあたりが端緒であると考えられる。それが、セデスにより「名称」と「機能」が一致する見解が打ち出され、同呼称が定着化してゆく。しかし、実存遺構から考慮すると「この小祠堂」は、経典類を収蔵する建物というよりはむしろ、何がしかの信仰対象物を奉る建物である可能性が高いという結論に到る。

サベロス・プウ(Saveros POU)の指摘<sup>17</sup>の様に、クメール建築における建築名称が、それら碑刻文の解読が十分になされぬまま先行する形で名付けられたことは、当時の事情を考慮すると、止むを得ないことかもしれないし、一度使い始めて既に定着した呼称を、その起源の曖昧さを盾に取って、もう一度再構築を図るのは容易なことではない。但し、俗称として名付けられた誤用を含む名称が、このままもちい続けられれば、その誤用が歴史的な解釈に与える影響は大きく、今後、随時指摘され、表記の一元化に向けた努力が求められる。

他方、「この小祠堂」の本来の機能をより突き詰めるためには、その遡源<sup>18</sup>となる「前アンコール期」の建築やインド、カンボジア周辺国の同建築との類推が必要であり、今後の研究課題となるであろう。

本稿は「『経蔵』と呼ばれる建物の名称と由来とその機能についての一考察 アンコール遺跡を通じた保存・修復研究(その3)」(日本建築学会学術講演梗概集(中国)1999年9月 荒樋久雄)をベースに加筆・修正したものである。

---

<sup>17</sup> 前掲注3,p.204 但し、同氏の指摘は、クメール寺院名に関するもの

<sup>18</sup> 源にさかのぼること。根本をきわめること。